



はだかの王さま (21)

ご家来の中には、前にお使いに行ったことのある、ふたりの年とった、正直者のお役人もまじっていました。うそつきどもは、このときとばかり、いっしょうけんめいに織っていました。けれども、もちろん、一すじの糸もありません。

「まことにすばらしいものではございませんか！」と、正直者のふ



はだかの王さま (22)

たりのお役人が言いました。「陛下、ようくごらんくださいませ。なんとというよいがら、なんとという美しい色合いでございましょう！」

こう言いながら、ふたりは、からの機を指さしました。なぜって、ほかの人たちには、この織物が見えるものと思ったからです。

「や、や、なんとしたことじゃ！」と、皇帝は思いました。



はだかの王さま (23)

「わしには、なんにも見えんわい。
こりゃ、えらいことになったぞ。
このわしが、ばかだというのか。
わしは、皇帝にふさわしくないとい
うのか。わしにとっては、なに
よりもおそろしいことじゃ」

けれども、口に出しては、こう
言いました。

「おお、なるほど。じつにきれい
じゃのう！ 大いに気に入ったぞ」



はだかの王さま (24)

こう言って、満足そうにうなずきながら、からっぽの機をよくよくながめました。もちろん、わしには、なにも見えん、などとは言いたくありません。

おともの人たちも、きよろきよろ見まわしましたが、みんな同じこと。なにひとつ見えません。けれども、だれもかれも、皇帝のまねをして、



はだかの王さま (25)

「たいへんおきれいなものでございます」と、申しました。そして口々に、「近いうちにおこなわれるご行列のときに、このあたらしい、りっぱなお着物をお召しになっただけはいかがですか」と、すすめました。

つづく